

室田 一雄・塩浦昭義：「離散凸解析と最適化アルゴリズム」朝倉書店の補足と訂正
(2013 年第 1 刷)

誤りを見つけた方は室田までお知らせくだされば有難く存じます。

- 14 頁 下から 1 行目：

下記のカラバのアルゴリズムである。

⇒

下記のアルゴリズムであり、本書ではこれをカラバのアルゴリズムとよぶ。

- 28 頁 11 行目：

有向路 P 上の頂点で、 S に含まれ、かつ s に最も近いものを v_j とする

⇒

有向路 P 上の頂点で、 S に含まれ、かつ s に最も近いものを v_j とする (すなわち、 j は $v_j \in S$ を満たす最小の添え字)

- 30 頁 命題 2.14 の直前:

この事実より ⇒ この事実と定理 2.8 より

- 157 頁 命題 13.2: 二つ目の文を以下のように変更してください。

したがって、貪欲アルゴリズムの反復回数は $\eta(p_0) \leq 2\Phi_g$ 以下である。

⇒

したがって、貪欲アルゴリズムの反復回数は $\eta(p_0)$ に等しく、これは $2\Phi_g$ 以下である。

- 162 頁 (14.5) の $f_2(x) = f(x) + \Gamma|x(N) - r|$ が M 凸関数になる理由：

注意 9.1 (113 頁) のようにして f, f_2 に対応する $n + 1$ 変数の関数 \tilde{f}, \tilde{f}_2 を定義すると、 $\tilde{f}_2(x_0, x) = \tilde{f}(x_0, x) + \Gamma|x(0) + r|$ となる。この右辺は、 M 凸関数と分離凸関数の和の形であるから、 M 凸関数である。

- 202 頁 文献 20: (2003) ⇒ (2002)

- 203 頁 文献 44: to appear. ⇒ Series A, **145**, 163–177 (2014).

- 203 頁 文献 54: **23**, No.2 (2013), 掲載予定. ⇒ **23**, 233–252 (2013).

(以上)